

国語（中）部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

生徒が生き生きと取り組み、確かな国語の力をつける授業の創造
～すべての学習の基礎となる、豊かな言語感覚を育成するために～

2. 主題設定の理由

過去2年間、国語（中）部会では、各教科学習における言語活動の基盤となる言葉力や身に付けた言語能力を活用する「総合的な言語能力」の育成を目指してきた。そのためには、生徒が意欲的に学習活動に取り組もうとする「魅力的な授業」を展開することが必要である。生徒の達成感や仲間との共感・所属感を生み出すことが、魅力的な授業の条件であると考えます。

「教材をどう教えるか」ではなく「教材で何を教えるか」を追究するのが国語科の特徴と言える。だからこそ、教材を深く読み取り、教材価値を明らかにし、「授業のねらい」を明確にして構想を立て、1時間1時間の展開を工夫することが求められる。そうして作られる授業こそ、生徒が目を輝かせて生き生きと学ぶことができる授業になり得るのであり、私たちが目指す確かな国語の力をつけることができるのである。

研究会で公開されるような授業の裏には何十時間も準備があるが、日常の中でこれと同等の労力をさくことは難しい。そこで、共同研究による報告を追試し、データベース化することで「生徒の目が輝いた授業」が部会員全体のものになるのではないかと考えた。

3. 研究仮説

作品の教材価値と授業のねらいを明確にし、実際の指導場面での言語活動の見通しを持ち、授業展開を工夫することが、生徒が生き生きと取り組む授業の創造につながる。

4. 研究内容

①作品の教材価値を見出し「授業のねらい」を明確にした教材構想の工夫

- ・指定教材を設定し、過去の課題を踏まえて個人研究を進める。
- ・二次研究協議会の場で、指定教材をもとに公開授業を行う。
- ・公開授業、個人研究をもとに活発な議論を行う。

②部会員のレポートを追試し、改良を加える試み

- ・昨年度部会員の研究成果を教材ごとにまとめ、事務局より提示する。
- ・過去2年間のいずれかのレポートに沿った、あるいは改良を加えた授業を実践し検証する。

③指導者である教師自身の言語力（知識・言語感覚・読解力など）を高める取り組み

- ・理論（実技）研修会をうけ、各自が実践を行ってレポートを作成し、その成果と課題を交流する。
- ・二次研究会において「指定教材」を共同で教材分析する時間を設ける。

5. 研究方法

①各市町村単位で「地域サークル」を組織し、指定教材を中心に地域単位での共同研究を行う。その成果と課題について議論を行なった上、石教研第二次研究協議会に持ち寄る。

②中心グループによる研究成果を、専門部会第二次研究協議会において公開授業として発表する。さらに部会協議において、研究主題にせまる研究内容や成果などを部会員によって研究協議する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

4月15日(火) 石教研第一次研究協議会
 18日(金) 各市町村で第一次研究協議会
 9月9日(火) 各市町村で第二次研究協議会

10月17日(金) 専門部会第二次研究協議会(北広島)
 2月6日(金) 各市町村で第三次研究協議会

2. 専門部会第二次研究協議会での交流

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容

1年生 教材「星の花が振るころに」

授業者：秦泉寺悠加 教諭(石狩市立花川南中学校)

本時の目標 ・「わたし」の気持ちの変化についてグループで積極的に交流する。
 ・銀木犀に対する描写の違いを知り、「わたし」の気持ちの変化を読み取る。



<本時の展開>

	学習活動、内容	教師の関わり	評価規準・備考
導入	☆前時を振り返る ☆学習課題の把握 なぜわたしは銀木犀の花をばらばらと落としたのだろう。	・前時のノートやワークシート確認。	
展開	☆本文を読み内容を確認する。 銀木犀が示す意味を確認し、その特徴を知る。 ☆美しい思い出だった銀木犀の存在を振り返る。 ①夏美との思い出はどのようなものでしたか。 ・花で何かを作る約束、お守り ・二人だけの秘密基地 ☆おばさんの話から銀木犀の特徴を知る。 ②おばさんは銀木犀についてどのような特徴を話しましたか。 ・葉っぱが落ちて厄介 ・古い葉を落とし新しい葉っぱを生やす ③わたしが首をかきあげたのはなぜですか。 ・銀木犀は常緑樹で一年中葉っぱがしげっているため、葉は落ちないと思っていたから。 わたしが銀木犀の花をばらばらと落とした理由を考える。 ☆ばらばらと落としたときの「わたし」の気持ちを書く。 ・夏美との関係にこだわらず新しい友達を作ろうと思った。 ・どちらでもよい、どうでもよくなった ☆班で意見を交流し、いろいろな立場の考えを知る。	・既習事項を振り返らせる。 ・挙手により数人指名する。 ・本文のページ数をしっかりと確認する。 ・できるだけたくさんの生徒を指名し、意見を聞く。	
まとめ	☆再度自分の考えをワークシートにまとめる。 ☆書いた内容を発表する。	・時間があれば発表させる。 ・次時は物語の続きを書くことと伝える。	銀木犀に対する描写の違いを知り「わたし」の気持ちの変化を読み取る(読むこと)

<授業者より>

・生徒の興味をひく教材であるので、最後に物語の続きを書かせるという目標を設定し、一段と意欲を高めさせることをねらった。突拍子もない話にならないように、本時の課題をふまえて書くことにつなげていきたい。研究主題の「生き生きと」というところに目を向け、「～できた」という達成感を味わわせることが、豊かな言語感覚の育成につながるのではないかと考えた。

<意見交流>

・最後の場面でさらにいろいろな意見をくんでいけるとよい。根拠を板書していくと、まとめにつながるのでは。
 ・まとめがあると、学力の低い生徒によいのではないか。ただ考えをまとめてしまうとオープンエンドにならないか。

2年生 教材「盆土産」

授業者：小川琢治 教諭（石狩市花川中学校）

本時の目標・祖母が墓参りの際にどんな報告を墓参りでしているのかを根拠を明確にして考えることができる。

<本時の展開>

展開	学習内容	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導入 5分	1. 前時の内容の確認 2. 本時の課題および目標の確認	1. 家族それぞれどのような存在なのかを中心に思い出させる。	
展開 40分	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">祖母は墓参りの際にどんな報告をしたのだろうか？本文を根拠に考えよう。</p> 3. 祖母について書かれている部分を全文中から探す。 4. 探した表現から祖母がどのような人物であるかを考え、発表する。 5. 墓参りの場面を読む。 6. 祖母がお墓で「えんぴフライ」と言ったときにどんな報告をしたかを考える。 (1)自分の言葉で書いてみる。 (2)グループで交流する。 (3)学級全体で交流する。 (4)他者と比較してよりよい内容になるよう再考する。	3. 祖母の「会話」「行動」「様子」に注目させる。 4. それぞれの箇所からできるだけ祖母がどんな人物であるかを簡潔に言い表す。 5. 机間巡視 6. ワークシートを配布し記入させる。 (1)(2)根拠を明確にしなが、自分考えを持ち、他者と意見を比較させる。 (3)(4)学級内で交流したことをもとに自分の意見を見直す。	【読むこと】 祖母の言葉や行動から根拠を明確にし、祖母が墓前で伝えた内容を考え、話し合い、自分の言葉でまとめる。
まとめ 5分	6. 本時のまとめをする。 7. 次時間の予告をする。	6. 作品のテーマに沿って考えること、考えの元になる根拠の見つけ方などを振り返る。	

<授業者より>

・生徒はがんばっていた。やんちゃな学年で、説明的文章は難しいだろうが「盆土産」をやってみたかった。方言や時代背景がわからない生徒が多いので、書画カメラなどを使い、段階をつけて理解させる工夫をした。ワークシートを駆使して、言語について深めていくようにした。学習的に厳しい生徒について、読み物を扱うような長い授業にどう集中させるかが課題であった。グループでの話し合いは難しいし、ノートも書けない。そうした生徒への手立てとして、別プリントで対応したり、声かけをおおくしたりした。

<意見交流>

- ・学習に困難を感じる生徒への働きかけは、1時間で効果をあげるのは難しい。毎時間の積み重ねが必要。いい点があれば大げさに褒めるなど、周りの子どもたちの理解を得ることも大切。
- ・きめ細やかな授業であった。この教材の価値をどこに見出すのが難しい。言葉にならないものを言葉にしていくことにアプローチしていくということで、祖母に焦点を当てたのだろう。
- ・わかりやすい例から入った方がよい。みんなでわかちあうという切り口から入っていったらよかったのではないかな。できるだけ似たようなわかりやすい価値観から入っていてもよいのではないかな。
- ・祖母のセリフを考えるとというやり方はとてもよい。小川先生は、どこまで書ければよいと考えたのか。紹介する順番を意図してもよかったのではないかな。



3年生 単元「論旨を捉える」 教材「ネット時代のコペルニクス—知識とは何か」

授業者：浅野克実 教諭（石狩市立樽川中学校）

本時の目標：・「学ぶ」とはどういうことかについて、自分の意見を持つ。（読むこと）

- ・論題について、明確な根拠を持って自分の考えを話すことができる。（話すこと・聞くこと）
- ・まとめや、まとめを説明するための具体例など、自分の考えたことを短い文章にまとめることができる。（書くこと）

<本時の展開>

段階	時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
アプローチ	7	漢字テスト マイクロ・ディベートの想起	○漢字の筆順、気を付けるべき読み、形など	
課題設定	3		○課題の板書 「学ぶ」とはどういうことか？	
解決・努力	30	○ニュースを読む ○論題の設定 ○賛成・反対両方の意見を書く ○マイクロ・ディベートの確認 ○まいくろ・ディベート（×3） ○最終的な自分の意見を書く ○意見の交流	○プリント配布 ○論題の板書 「宿題代行業者に賛成か反対か」 ○マイクロ・ディベートのルールの確認・注意事項 ○グループ分け ○時間の管理	○自分の意見を持つことができる。（読む） ○ルールに則ってマイクロ・ディベートに取り組むことができる。（関心意欲） ○論題について明確な根拠を持って自分の考えを話すことができる。（話す聞く）
定着・習熟	10	○まとめ ○まとめを主張として、小学生を説得する場合、どんな具体例を示すか。	○まとめの板書 ○次時の予告	○課題に対するまとめを自分の言葉で書くことができる。（書くこと） ○まとめについての具体例を簡潔に書くことができる。（書くこと）

<授業者より>

・春に「ネット時代のコペルニクス」を取り上げようと思った。三学期制のところはいいけれど、今日が後期二日目なので、流れの中での授業公開は難しい。7月に「高瀬舟」でマイクロ・ディベートを行った。安楽死について考えたあと本文に入った。黙っている授業はつまらない。しゃべりたくなる、動き出したくなるなど、活動する場面を多く設定する授業を意識した。

<意見交流>

- ・授業のラストで「知識を増やすこと」について触れられていたのが、次時から「ネット時代のコペルニクス」を読むためのいい導入になっていた。
- ・ディベートが活発であり、学級の雰囲気がとてもよかった。子どもたちがきちんとメモをとっていた。
- ・一人一人がしっかり考え、共有できていた空間だった。教え合いコーチングしあう授業という、これからの国語の授業を意識させられる内容だった。
- ・教科書を話題のひとつにできる。今日のような大事な部分をしっかりやれることが大きい。
- ・マイクロ・ディベートという生徒の活動が大変良かった。別なグループとの交流や全体で意見交流するなどの場面があってもよいか。最後に「学ぶとは…」と板書してもよかった。ただ、生徒の実態に合った見事な着地だった。
- ・石教研の場でも、3、4人の小グループでの話し合いを取り入れてみてもよいかもしいない。



作品をどう捉えるか？～教材分析の交流～
生徒に身に付けさせたい力とその方策について探る



分科会① <レポート交流>

学年ごとにレポート交流を行った。新教科書になり3年目を迎えた今年は「追実践」をコンセプトにレポート作成を行った。指定教材に対する多くの実践が寄せられ、新たな教材価値の発掘など、教材研究の観点において深まりが得られた。以下、学年別に中心となった話題についてまとめた。

1年生

【子どもにやる気スイッチを入れるために】

- ①「達成感」「共感」「疑問」
- ②子どもたちの力の把握と過程、手順を明確にすること。
- ③答えが出ることの面白さを伝える

【グループ学習での意見のまとめ方】

- ①テーマごとに黒板に貼る。
- ②実物投影機を使う。（電子黒板なども）
- ③根拠となる表現やページ数を示す

2年生

☆根拠を明確にした読み取りが大切である。本文の表現を根拠にして読み取れるよう工夫することが必要。

☆朝読書の時間を使って、全校朝読書などを行い、子どもの読みの時間を確保することの必要。

（全校朝読書…今年度は「杜子春」。全文を5つの場面に分け5日間かけて国語科教諭が放送で朗読した。）

3年生

△学力は高くなり、音読などできることはするが、反応が薄くなる。 … 授業を活性化させるには??



- 班で交流し、全体で発表させるという流れは活性化につながる。
- 言葉にこだわって読む経験を積ませる。生徒の中に言葉の広がり生まれ、書く力を育てることにつながる。
- それぞれの学年でつけさせたい力を考えた授業づくりをすることが大切。

分科会② <小グループでの共同教材分析>

学年ごとに小グループに分かれての共同教材分析を行った。指定教材は「麦わら帽子」「クジラたちの声」という過去の教科書教材である。「教材をどう教えるか」より「教材で何を教えるか」ということに重きが置かれる国語科の授業作りにおいて、教材化の視点を交流し、議論し合えたことで、個人内研究の深まりが得られた。



Ⅲ. 教育課程の研究

教科書が新しくなって三年目。新しい教科書が目指す国語力の育成について、感覚的に馴染んできた頃である。今年度は「追実践」をテーマに研究を行ってきた。手探りの教材研究が続く一方、子どもたちの力が輝く魅力的な授業実践も数多く生まれている。それらを管内共有の財産にし、我々教師自身の教師力向上を目指した研究であった。次年度以降も、学習指導要領にもとづき、これまで積み重ねられてきた実践・研究成果を活かしながら、部会員の意見・要望を集約して編成・改訂を行っていききたい。



IV. 実技・理論研修会

1. 理論研修会

- (1) 日時 7月15日(火) 15:00～16:30
- (2) 場所 石狩教育研修センター
- (3) 講師 上村英生氏(北海道新聞社 校閲部部長)
- (4) 演題 「適切な言葉を選ぶ」～新聞校閲を通して考える。昨今の言葉事情～
- (5) 内容 ①実際にあった校閲を通して感じる昨今の言葉の揺れ動きと、適切な表現を考える際のポイント
②作文する際、子どもたちが言葉を自ら探し出していくための方法

2. 実技研修会

- (1) 日時 11月13日(木) 15:00～16:30
- (2) 場所 北広島市立東部中学校
- (3) 講師 鈴木ひとみ教諭(北広島東部中)、澁谷明範教諭(江別第三中)、柏裕教諭(千歳北斗中)
- (4) 演題 ICTを活用した授業の実践報告
- (5) 内容 ①電子黒板を利用した授業の実際
②デジタル教科書の活用について



理論・実技研修会の成果

理論研究会については、教員以外の方のお話をいただくことができ、参加者からも「新鮮だった」という声をたくさん聞くことができました。子どもたちの「国語力」は、いわゆるテストで点数をとるための「学力」であってはならない。自分の人生を広く開拓していくための生きた言葉の力として考えるときの参考になる、大変有意義な内容であった。

実技研修会については、近年急速に取り入れられているICTについて行った。設備はあるものの、実際に活用するところまでは至っていないという現状を踏まえての内容であったため、勉強になったという声が多く聞かれた。ICT環境の充実によって、国語科でも「できること」の幅が大きく広がるはずである。そうした「未来」を見据えるきっかけになる充実した時間であった。

V. 部会研究の成果と課題

<成果>

今年度は役員が新体制となり、新たな方向性を求めて研究体制の確立にあたった。重点としたのは「生徒が生き生きと取り組む」ことと「確かな国語の力をつける」ことの両立である。そのために①「授業のねらいを明確にした教材構想の工夫」②「追試、改良の試み」③「教師自身の言語力向上」の三点を柱に研究を進めた。指定教材を中心にした研究のスタイルは踏襲し、今年度は過去の指定教材すべてを対象とした。追試、改良の試みを全面にだすためである。その結果、二次研究協議会のレポート交流の場では、過去の実践の要素を取り入れた魅力ある授業実践が多数紹介され、個人内研究の深まりを得ることができた。明日からの授業に生かせる「生きた」力として、有意義な時間になった。また、小グループでの共同教材研究では、教材研究について新たな視点を得ることができたという感想を多く得ることができた。「教材をどう教えるか」ではなく「教材で何を教えるか」が国語科教育の魅力のひとつである。その意味では、各自の持論を同じ目線で交流し合える共同研究の場は大きな意味を持つ。次年度以降も、部会員全員の協力のもと研究をさらに深めていきたい。

<課題>

研究主題に掲げた「生き生きとした取り組み」と「確かな国語の力」の両立に向けて、更なる研究の深化が求められる。何をもち「生き生き」と判断し、どのような力が「確かな」国語力なのか。多様な価値観が生まれる国語科教育の中で、答えはひとつに定まらないかもしれないが、研究として一つの指針を打ち出すためには、更に多くの実践研究と考察が必要である。次年度以降も、より幅広い分野を網羅しつつ、研究が体系的に積み重なっていくような研究体制の確立が求められる。

(文責 石田 哲太)